花火大会

くじら

「おーいサトシ、花火大会に行くぞー」
そうインターホンで言われて、毎年一緒に一人の友達と行っていた花火大会に今年も誘ってくれたうれしさもあり、僕は急いで玄関を開けた。
「おまたせ！　さぁいこ……」
そこで僕は止まってしまった。どうも自分はどうにかなってしまったようだ。最近疲れることあったかな……。
「どうしたサトシ？　なにぼけっと突っ立っているんだ」
「ごめん、今日って何月だっけ？」
確かに、玄関の外には僕の友達がいた。その友達が、馬鹿にしたような顔で一言。
「何を言っているんだ？　花火大会だぞ。毎年八月の一番最後の土曜日って決まっているじゃないか」
そりゃそうだ。クマゼミがシャワシャワ鳴いているのが聞こえるし。よし質問を変えるか。いや、それともなんでもないように接した方がいいのだろうか……。そう考えていると、
「なにをしている？　早く行かないといつもの場所が取られてしまうぞ」
「その前に、一つ聞いていい？」
「なんだ、あらたまって」
「その格好はなに？」
「そんなことか。これは自分の中で花火大会とともに我慢大会も開催しているからに過ぎない。別にサトシはまねしなくていいぞ」
そ、そうなんだ……。なるほど、だからニットの帽子に、首にはマフラーを巻き、厚手のコートを着ているのか。それにしても助かった。あんな格好で過ごしたら、身の危険を感じるや。うーんそれにしても、コイツはこんなことさえしなければ、可愛いとおもうんだけどな……。短い髪の毛で、ぱっちりした目に、いつもニコニコしている顔を見ると本当にそう思うよ。
「でも、どうして我慢大会もしているの？　花火だけじゃ物足りない？」
「いや、もちろん違う。でも小学校生活で最後の花火大会だぞ。何か面白いことをして、思い出に残したいじゃないか」
残したいじゃないかって言われても……。僕は普通に花火見たいんだけどなぁ。
「そんなことより早く行くぞ。ボヤボヤするな」
そう言いながら、真冬の格好をしている友達に腕を引っ張られ、僕は家を出発した。よく考えると、コイツの横を歩かなくちゃいけないのか……。

花火大会の場所は僕の家から歩いて十分程度の場所にあるから、夏でも少し汗をかくくらいで済むんだけど、僕の横を歩いている友達の汗が尋常じゃなく、みているこっちが心配になる……。ちなみにいつもの場所とは花火のよく見える河川敷のことで、なんとなくいつも同じ場所にいる。人は本当に多いけど、よく花火がみえるポイントなんだ。

「汗すごいけど大丈夫？　顔も真っ赤だよ」

「大丈夫だ。問題ない。なんだかコタツにみかん。それか、焼き芋でも食べたい気分だ」

いやいや、絶対に大丈夫じゃない。でも冗談言っているし、まだ大丈夫なのかな？　とりあえず自販機で水でも買おう。お金少し持ってきてよかった。このままじゃ脱水か熱中症で倒れちゃう。本当はコートとか脱がすのが一番なんだろうけど、コイツは自分が始めたことには、意地でも最後までやらないとすっごく機嫌が悪くなるし……。それにしても、よくいろいろなこと思いつくよなぁ。次から次へと変なことばっかり思いついて。あと、さっきから、周りの人たちの目線が痛い。そりゃ、真夏の花火大会に、真冬の格好をしていたら僕もみちゃうけどさ。いったいどうして僕がこんな目にあっているんだろう……。神様、僕は何か悪いことしましたか？

花火が始まるまで少し時間があったから、河原で座りながら、二人でくだらないことを喋っていたけど、とうとう、まずくなってきたみたい……。どんどんコイツの口数が減ってきている。それにニットの帽子とマフラーは汗でびちょびちょだ。コートは分からないけど、中はすごいことになってそう……。

「ねぇ、そろそろ脱がない？　よくここまで頑張ったよ。僕はすごいと思うな」

「……な、なにをいっている……。ぜったいにやめないぞ……」

とか言いながら、僕にペタンともたれかかってきた。えっ、目つぶってる！　よかった、息はしている。もういいや、帽子もマフラーもコートも脱がしちゃえ。あー、やっぱりコートの中も律儀に長袖だよ。汗すっごいし……。ちょうど、コートを脱がし終わったところで、ドンっ！　と大きな音がした。花火大会が始まっちゃったよ。

「おーい、起きてー。花火始まったよー」

と言いながら、ほっぺたをフニフニしたり、軽くひっぱたたいたりしたけど、反応があまりない。返事がない、ただのしかばねのよう……。なんちゃって。いやいや、なんて物騒な。水を口元に近づけると飲めるみたいだし、とりあえず、うちわで扇いでおいてあげよう。まったく、せっかく一緒に花火見にきたのに……。

「陽子ちゃん、おとなしくしていたら絶対可愛い女の子だと思うよ。男の僕が言っているんだから間違いないよ。なのにどうして君はそうなんだろう……」

相手が聞いていないと分かっているから、こんなことが言えるんだろうな。そう思いながら僕はどんどん打ち上げられていく花火を見上げていた。